

青丘文庫 月報

No.181

2003年9月1日

図書室 〒650-0017 神戸市中央区楠町 7-2-1 神戸市立中央図書館内

TEL 078-371-3351 相談専用TEL 078-341-6737

編集人 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (財)神戸学生青年センター内

飛田雄一 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878

郵便振替 00970-0-68837 青丘文庫月報 年間購読料 3000 円

※ 他に、青丘文庫図書購入費として 2000 円/年をお願いします。

ホームページ <http://www.ksyc.jp/sb/> (アドレスが変更になりました)

自然と子どもと共に遊ぶ反省生活、できるかな？ 金 河元

去る2月中旬、2週間ほど友人と二人でスウェーデンに行ってきた。

学校創りの一環である。近年韓国の仲間たちと新しい形の保育園と小・中・高一貫の学校を作る話をしている。保育や教育の問題が指摘されて久しいが、今の韓国社会のあらゆる問題と深くつながっているのも、複雑な課題が多く絡んでいる。小さな村全体が保育園や学校を囲んで多様なパイプを通してつながっている形を考えている。

保育園や学校の建学理念をどう設定するべきか、またその理念に相応しい具体的なカリキュラムをどのように作ることができるのか、子供たちの親や保護者と保育園や学校とのパイプはどう設定され得るか、これらのファクターと村全体との間ではどのようなパイプの設定が可能なのか、等々の問題をめぐってかなり多くの時間を費やしてきたものの、いまだグループの内部で十分なコンセンサスができていないと難しい。話を続けるのもいいが取りあえず行動に移してみようと、今年に入ってから一人のメンバーの農場（慶尚南道統営市所在）を拠点にしてキャンプ場造りの作業が始まっている。キャンプ場造りやその運営を通して上述の様々な課題がより具体的に現れてくるのではないかと、とりあえず中間決算として話がまとまったことになる。学校造りや村造りへ向かってより具体的な作業が始まったわけである。

これらの課題を考えていくひとつの切り口としてスウェーデンの幼児環境教育プログラム（120余年の歴史を誇る全国的規模のNPO団体「スウェーデン野外生活推進協会」のプログラム「ムッレ教室」の日本版たる日本野外生活推進協会のそれ）に注目して早7年になる。その「ムッレ教室」のプログラムをもとに色々な形の提案をその間やってきたつもりである。去年あたりからやっとひとつの動きが見え始めたような感じである。

「ムッレ教室」に僕が引かれたのは、まずは今流行りの環境教育であったという点もあったが、環境教育そのものよりは環境意識をどう身に付けるかという方法論とその方法論を実行するフィールドであった。

その方法論とは、「公害問題が大変だ、環境問題を学習すべきだ、大人だけでなく次世代の担い手である子供にもせさせと理科や化学や生物など科学の学習を通して環境意識

を高めなくっちゃ。」という、すでに日常の社会現象になっている環境問題そのものだけのことでなかった。僕が「ムッレ教室」から自分の人生に対する反省のヒントをもらったところでもあるが、それは、子どもが自我とか理性とかをはじめ人格を総体的に形成していくやり方でもあった。

それはまず、人間が外界とコミュニケーションを持つ際、学者などがよく整理しておいた知識などを頭で理解することより先に、五感という本人自身のアンテナを通して外界の情報を入力すると言うところからことが始まるという発想であった。特にその外界とのコミュニケーションがその子供にとって原体験である場合はもっともの話である。言い換えれば、外界とのコミュニケーションのパイプたる本人の五感というアンテナを通して原体験を獲得することは、その人なりの自我や理性を形成していくことに、より自然な形になるのではないかという意図であった。少なくとも観念的には近代理性に絶対的な価値を持たせて生きようとしてきた僕自信にとっては、多くのことを考えさせてくれた。

外界への自発的な興味を旺盛に持っている子供という生き物が自分の五感というアンテナに主に頼って知的好奇心を広げていったり深めて行ったりする時その手助けをするものがリーダーであったり、図鑑や辞書など大人の活動なり研究成果であるということになる。勿論リーダーは前もってプログラムを用意するが、あくまで子どもの関心を重視して子どもの関心や興味が出てきたところにプログラムを合わせていく。

このような方法論を実行するフィールドは自然の中の自然物が中心になり、その主体的な実行者は子ども自身である。すなわち外界からの情報源は、遊具や器材や書物などより自然そのもの（自然体の仲間やリーダーをも含めて）を主に対称にするし、それら自然物や自然現象を大人の仲介なしで子どもが主体になって接するという方法である。

人間の合理的な便利さに焦点を絞って築かれている部分があまりにも多いこの時代の世相からしては理に合わないところも多く出てくると思う。しかしそのような部分が大事にされて発展していく社会の可能性もあるかもしれない。その可能性を大きな枠組みである社会よりは取りあえず子どもという人間一人一人の中で探してみたい。子どもが実験の対象になるのでは？確かに。だが、自然の中というフィールドでその子自身の中から求めているものの顕現に主に応える人に育っていくことは今のところ余り問題のない育児のやり方でもあると思うが。

このプロジェクトを推し進めていく際、僕は学生時代から今までの生活に対する反省がある程度できているのではないかと暗に考えていた。それは、近代理性への確信に対する反省を込めてのものであったはずだが、反省ところか今述べたように、いまだその中で甘い汁を吸いながら遊んでいる自分の姿が見え見えで、その自分の姿がまだいやになってくる。しかし今僕にできることがまだこのようなどころにあるということ、それからそれらの問題を考えていくことができることだけでも感謝する気持ちで幸せである。

概して僕にとっては近代理性の再構築の可能性へ賭けている仕事といえようか、いずれ遠からず構築されるはずの近代理性を超克した社会の出現を夢見ながら。根底から徹底した近代理性を超克しようとする動きが具体的に展開していく歴史の滔滔たる流れの中で、それらの動きがもっとズムーズに行われんことを願いながら、僕らの活動がそれらの動きに少しでも役立てることを願いながら。

第3回在日朝鮮人運動史研究会大会

2003年7月12日(土)～13日(日)、滋賀県立大学で開催されました。

古庄正(関東部会、駒澤大学名誉教授)「朝連栃木県本部の戦後補償運動と問題点」/塚崎昌之(関西部会)「1945年4月以降日本に送られた朝鮮人『兵士』について」/崔ヨンホ(霊山大学国際学部)「終戦直後、仙崎における朝鮮人帰還について」/李ハンチャン(全北大学東洋語文学部)「韓国における在日朝鮮人文学研究の動向」/鄭ヘギョン(韓国精神文化研究院)「韓国における戦時期強制連行関連の研究と運動について」の報告がなされました。ウトロ地区のフィールドワークも行われ、有意義な大会でした。大会報告者でもある塚崎昌之さんが『ピースあい』81号(2003.8.25)に掲載された報告を再録させていただきます。

ピースあい第81号

七月十二・十三日

世界各国からの関心集め

在日朝鮮人史研究の大会開催

強制連行を

学問的に検証する

七月十二日、十三日の両日、彦根市にある滋賀県立大学で、「第三回在日朝鮮人史研究大会」が開催されました。滋賀県立大学には、朝鮮人強制連行研究の第一人者・故朴慶植氏の手による資料六万点(「朴慶植文庫」として順次公開されつつあります。在日問題を研究している韓日民族問題学会など韓国からの七名のほか、アメリカ・ヨーロッパからの参加も含めて約八〇名が参加しました。

日目の全体会では、古庄正氏「朝連栃木県本部の戦後



鄭惠瓊氏は、韓国で強制連行に関心が高まったのは一九九〇年代からであり、二〇〇〇年以降、資料と証言の収集が積極的に行われつつあることを報告されまし

補償運動と問題点」/塚崎昌之「労働者としての朝鮮人『兵士』と朝鮮人強制連行」/一九四五年四月以降を中心として、崔永錫氏「終戦直後、仙崎における朝鮮人帰還について」、李漢昌氏「韓国における在日朝鮮人文学研究の動向」、鄭惠瓊氏「韓国における戦時期強制連行の研究と運動について」の五本のレポートが報告されました。

この報告の中で、古庄氏は戦後、朝鮮人連盟の活動によって連行者に対して慰労金や慰籍金としての一定の金額は支払われたが、労働に対する未払金が支給されることはなく、朝鮮人戦時動員の実情が無償労働の強制システムであったことを明らかにされました。

た。強制連行を「反日」感情からのみ「断罪」するのではなく、学問的に検証してこのうという姿勢が韓国では定着しつつあることが感じられました。

戦後も続く

日本政府の罪状

従来、一九四五年四月をも

って日本への朝鮮人労働者の強制連行が終わったと考えられていました。しかし、それは「徴用」の形式をとった連行が終わっただけで、それ以降は「徴兵」の形をとった連行が始まったことを意味していました。六万人近くの朝鮮人「兵士」が日本に送られ、兵器も与えられず農業労働・荷役・トンネル掘りなどの陣地構築などの過酷な労働に従事させられていました。

一九四五年三月に大阪築港にあった陸軍糧秣廠が空襲に遭い、四月以降米カントリークラブに疎開してきます。『故郷の嶺』の井戸木馬氏の証言に出てくるボロボロ

の軍服を着て荷役をしていた朝鮮人は、この「兵士」たちであつた可能性が高いのです。

「徴兵」の形式での連行は、連行者をより厳しい軍律で縛ることを意味しました。安城地下倉庫での金泳九さんのような「逃亡」は強制連行者の3割を超え、日本の「本土決戦」準備の計画を狂わせていました。

また、戦後日本政府は朝鮮人兵士に対する統計を「つ作り」ましたが、一九六五年以前の日韓交渉の場で、数の少ない方の統計を使用して交渉にあたりました。この少ない方の統計に労働者としての「兵士」が含まれていなかったことは、一目瞭然なのです。

日本政府側が取捨選択を意図的に行ったかどうかは不問にすにしても、少し見直せば数が少ない統計が明らかに間違っていることはすぐに気がつくはずです。この点でも、日本政府は戦時中だけでなく、戦後も罪を犯したと言っても過言ではありません。

【報告】塚崎昌之

滋 賀

●青丘文庫研究会のご案内●

第253回在日朝鮮人運動史研究会関東部会

9月14日(日) 午後1時～3時

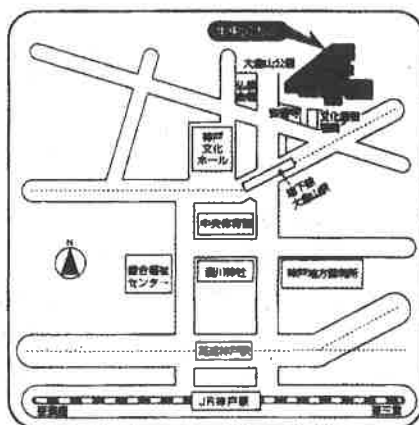
「1980年代の在日朝鮮人の指紋押捺拒否運動」

金隆明

第219回朝鮮近現代史研究会

9月14日(日) 午後3時～5時

「韓国民話の収集と絵本出版」金森襄作



【今後の研究会の予定】

10月12日(日)、在日(梁相鎮)、近現代史(金永基)

11月9日(日)、在日(塚崎昌之)、近現代史(堀内稔)

12月14日(日)、両研究会とも報告者未定、希望者は、飛田または水野まで。

【月報の巻頭エッセーの予定】

10月号(梁相鎮)、11月以降は、宇野田尚哉、坂本悠一、張允植、塚崎昌之、広岡浄進、福井譲、藤井たけし、藤永壮、堀内稔、堀添伸一郎、本間千景、松田利彦、水野直樹、文貞愛、森川展昭、山田寛人、横山篤夫、李景珉。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。

<編集後記>

- ★ あついあついといっても、しかたがないのに、あついあつい、ですね。みなさまいかがお過ごしでしょうか。7月の滋賀での大会は、滋賀県立大学の河かおる先生、学生のみなさん、ウトロのみなさんにお世話になりました。ありがとうございました。今回は、韓国でという話もでています。
- ★ 神戸学生青年センターのコンピュータが故障して、少々たいへんでした。何とか「救出作戦」をして、また月報をつくっています。
- ★ センターのホームページのひっこし(プロバイダの閉鎖なんです)のため、青丘文庫のホームページも引っ越しました。http://www.ksyc.jp_sb です。すっきりしたアドレスになっています。
- ★ 10月の研究会の日に神戸長田で「統一マダン」が開かれます。昨年、研究会の二次会で参加して好評でしたので、ことしも参加したいと思います。

(飛田雄一 hida@ksyc.jp)